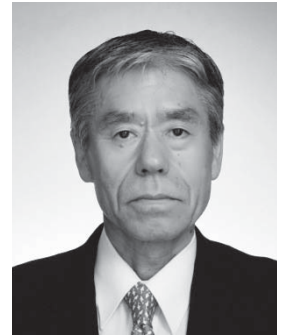



 巻 頭 言
 

立場をこえて


 伊藤 裕*
 Yutaka ITOU*

「加速器」を意識したのは高校一年の時だった。時の担任が物理の教師で加速器のことを話していた。大学を卒業して電機会社に就職、配属先は核融合、加速器、超伝導などの設計部署であった。40年間余りを同じ部署で過ごし大型の先端科学研究装置の建設を担当させてもらった。産業界の技術者を悩ます課題の一つに、製品分野や技術課題で「この仕事がしたい」との想いと、会社の方針とが、しばしば相反することである。加速器は汎用性の高いものから独創的で飛躍的な技術革新を伴う先端的加速器まで幅広い。学と産との関係の観点からすると、後の方がより悩ましい。限られた経験でしかないが、製造業の技術者であった者の想いを述べてみたい。

欧米の研究機関が独自に製造拠点をもち、開発と同時に建設も手掛けてきたのに比べ、日本では計画の初期から産学連携をうまく機能させ、加速器の建設を進めてきたと言われてきた。このことは日本の方式がより優れているとのニュアンスで語られることが多い。事実、加速器黎明期から「モノづくり」の面で支えたことを先輩方から聞かされた。しかしどちらかと言うと、個人的な人間関係や企業内関係者の内輪話的で、断片的である。戦後復興・高度成長が追い風に作用したこともあるが、優れて度量の大きい経営陣がいたのであろう。先端研究は話題性も高く一時的には注目されるが、事業としては規模や継続性の面で課題と認識されている。高度成長終焉以降は産業界の環境は激変し、加速器の様な案件の担当部署には厳しい時代に移っている。仕事が無くなれば人材も技術も分散せざるを得ない。しかし先端研究に係わったことは、産業界にとっても「人づくり」の面で大きな実りが有ったことは紛れもない事実である。

2011年3月の東日本震災以降「絆」が各方面で大きく取り上げられている。2004年4月に発足した日本加速器学会は当初から「連携」が謳われ、初代会長の木原先生は「内なる連携」と「外に向けた連携」を掲げ、学会の使命として加速器集団のポテンシャル向上「人づくり」を、また産学連携は「内なる連携」であると示された。これと相前後して産業界にも加速器に関する集まりが生まれた。日本電機工業会(JEMA)の「加速器特別委員会」で、製造業十数社が参加している。業界団体で「加速器」を名乗ったのは、これが最初で唯一と思われる。加速器を構成する物、技術は広範で、参加企業が加速器産業を網羅し代表しているとは言えないが、約900名の方が携わり年間400億円規模の仕事をしている。残念なことは加速器から撤退した企業が出たことである。また産業界からの加速器学会会員はさほど多くない。若手技術者に入会を勧めているが、敷居が高く感じられるのか敬遠される。

技術の継承が危ぶまれる中、「内なる連携」として、先端加速器科学技術推進協議会の活動や、加速器学会が産業界により門戸を開く努力を開始している。一例ではあるが、ILCを代表とする先端加速器開発としてKEKが「空洞製造技術開発施設」を新た整備し、産業界を先導しようと努力している。これらの動きに希望を持ちたい。産業界も組織の壁を乗り越えて柔軟に対応し、したたかに生き延びてもらいたい。

技術的に限らず様々な失敗やトラブルに遭遇した。先生方にもご迷惑をかけお叱りも多々受けた。課題解決に当たっては、産学共に組織の力が大きかった。しかし、気概を持ち続けられたのは、組織をこえた立場の違う人からの助言や、励ましが有ったことも事実である。係わった人達がひそかに誇りを感じるのは、手掛けた仕事が世に役立ち、世界的な成果を挙げることである。結果として成功した案件は、そう言う人が周りに居たと今でも思う。

「絆」と「連携」は似ているが、「絆」は人と人の繋がりを指す場合が多い。ビジネスライクが是とする風潮の世の中で、加速器学会が立場をこえた人と人の繋がりを大切にすることも、大いに機能することを期待している。

* (株)ひたちなかテクノセンター 技術士(原子力・放射線部門)